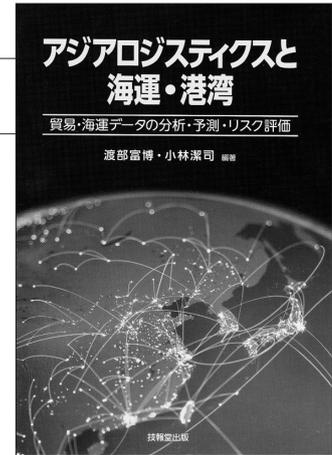


渡部富博・小林潔司＝編著

# アジアロジスティクスと海運・港湾

## —貿易・海運データの分析・予測・リスク評価—

2020年4月発行  
 本体3,200円＋税  
 技報堂出版  
 ISBN 978-4-7655-1868-0



川崎智也  
 KAWASAKI, Tomoya

東京大学大学院工学系研究科システム創成学専攻講師

本書はグローバルロジスティクスに関わる大学生・大学院生、港湾・物流・行政関係者、コンサルタントだけでなく、同分野を専門とする研究者までもを対象とする「アジアを中心とする国際物流の実際と研究の手引書」といえる。物流研究は総合力が問われる領域である。①現状に対する理解、②データの特徴に対する理解とそのハンドリング技術、③適切なデータ分析手法の選択とその実践技術、が特に重要であり、本書を一通り読むと、①～③に係わる示唆に富む知見を広範に得ることができ、同分野における自らの視座を高められる、極めて有用な書である。

本書では、各章でそれぞれ1冊の本になり得る専門性の高い内容を扱っている。それらの主要点を外すことなくコンパクトに1冊の本としてまとめられている。読了後、各章についてより深く踏み込んだ内容を学習したい場合、別の書に手を伸ばす、というのが本書の位置付けであろうと思う。国際物流の性格上、本書には数多くの専門用語が登場するが、どれも平易かつ丁寧な解説があり、多くの図表も理解を助けてくれる。本書を読み終えるころには、国際物流の仕組みと併せて、それら専門用語を一通り理解することができる点も明記しておきたい。

さてグローバルサプライチェーンでは、生産拠点の立地や分業体制が徐々に変化しつつある。本書では、「アジアロジスティクスの拡大」と「産業構造の変化」の関係について、多くの洞察がある。評者は土木計画学系の物流研究者であり、主にインフラ整備、輸送手段のサービス改善、インフラ運用形態の変化、などによる将来貨物フローの変化を取扱うが、その際、(世界的に多くの関連研究でそうであるように) OD貨物量は所与として設定されることが少なくない。国際分業体制とグローバルロジスティクスの関係や、その関係の変化に伴う国際貿易パターンの変化、アジアへの生産拠点の集中と基幹航路の船舶大型化の関係などを念頭に、将来OD貨物量を丁寧に生成す

ることの重要性について指摘されているように感じた。本書では経済活動の派生需要である物流の位置づけを「改めて」丁寧に解説しており、今後のさらなる分業化や我が国の中間材の取扱シェア拡大の中で、付加価値の繋がりであるバリューチェーンの重要性などとともに、日本がどのように生き抜くのかを考えるきっかけも提示してくれている。

国際物流における多岐に渡るデータの特徴と、その不完全性に伴う活用の注意点についても扱っている。国際物流では多くのデータベースが入手可能であるが、(特に評者は開発途上国の物流を扱うことも多いため) それらの多くで断片的な情報しか集まらない場合が多い。その場合、不足分はデータベース間で補完し合うか、推定により対応することが多いが、その不完全性を内包するデータを用いた分析方法についても解説があり、実務と研究両方に有用であろう。また、2、4章では貿易関連データが一覧表としてまとめられており、評者はこの一覧表の存在を大変ありがたく感じた(おそらく多くの物流研究者も同様と想像する)。今後、ことあるごとにこの一覧表を参照することになるだろうと思われ、まさに本書は必携である。

最終章(6章)では、今後特に考慮すべき5つの点(産業構造の変化、エネルギー構造の変化、技術革新、デジタル化などの貿易形態、輸送ニーズの変化)の重要性を解説したうえで、港湾をはじめとする将来のインフラ整備のあり方、取り組むべき課題について提言している。また、サプライチェーンリスク(コロナ禍以前に編集された書であるため、本書で扱うリスクは災害が中心である)に対する備えの重要性についても言及している。

以上を要するに、本書は、グローバルロジスティクスで求められる総合力を養い、視座を高められる、関係者にとっては必読、必携の書であると言える。実務上の政策の検討にも非常に有用な書と思われる、ぜひ一読をお勧めしたい。